3通りのロレンツの非線形連立差分方程式のスクリプト

SHIMURA Masato
JCD02773@nifty.com

2016 年 4 月 10 日

目次

1 ロレンツモデル

山も一度登ってそれっきりというよりも再度登ったり、登りなれたコースを変えて山で風景を愛ずるのもよい。

ロレンツの非線形連立方程式モデルを題材にかって使ったスクリプトを再度題材にしてみよう。

ここでは連立非線形差分方程式のスクリプトと連立非線形微分方程式の係数をマトリクスに落とし込んで、ルンゲクッタ法で数値解を求める方法を取り上げる。

ロレンツモデルは非圧縮条件、ナビエ・ストークス方程式、熱伝導方程式の 3 式から導かれる。

そしてこの 3 個のパラメータは σ がプランドル数、γ がレイリー数、b が系の物理サイズに係わるものである。

$$\begin{cases} X' = & -\sigma X & +\sigma Y & \\ Y' = & -XZ & +\gamma X & -Y \\ Z' = & XY & -bZ & \end{cases}$$

$\sigma = 10, b = \dfrac{3}{8}, \gamma = 28$ がロレンツのオリジナル・パラメータである。

書きためた論稿の中に 3 種のロレンツの差分方程式のスクリプトがあった。

1. APL 協会の山下、西川両氏の発表されたロレンツモデルの差分方程式とカオスモデルには長年親しんできた。
2. 差分方程式のタシット型定義

3. マトリクスとルンゲクッタ-法による解法

1.1 山下、西川

ロレンツの方程式 (1963) を離散化し、漸加法で構成する山下, 西川によるスクリプトが JAPLA で公表されている。
*1

このスクリプトはいきなり差分方程式を書き下ろしている。

$$\begin{cases} \dfrac{dx}{dt} = \sigma(y - x) \\ \dfrac{dy}{dt} = x(\rho - z) - y \\ \dfrac{dz}{dt} = xy - \beta z \end{cases}$$

σ is Prandtl number

ρ is Rayleigh number

$\sigma, \rho, \beta > 0$

usually $\sigma = 10, \rho = 28, \beta = 8r3$

```
dt=: 0.005  NB. or 0.01
%NB.10 50 8r3&calc_lorenz plot_lorenz init

  lorenz1=:4 : 0
NB. Lorenz attracta
's r b'=. x    NB. parameter
'xx yy zz'=: y NB. initial 5 8 10 or 1 1 1
X=: xx + dt*s*(yy-xx)
Y=: yy + dt*((r*xx)-(yy+xx*zz))
Z=: zz + dt*((xx*yy)-b*zz)
X,Y,Z
)
```

```
'noaxes' plot {@|: 10 28 8r3 lorenz1 ^:(i.2000) 0.1 0.2 0.3
 pd 'save jpg c:/temp/lorenz_10.jpg'
```

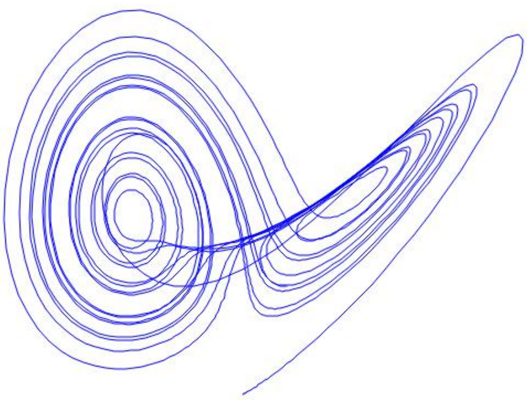


図 1　Lorenz

*1 パラメーターと初期値を分離するため若干改良した。

1.2　もう一つのロレンツアトラクタのスクリプト

J の達人がタシット形式で書いたメモが残っていた。スクリプト自体が鑑賞の対象になる。

```
load 'plot'
''X Y Z'=: (0&{)'(1&{)'(2&{)
's b r'=: 10 8r3 28

dx=: s * (Y - X)
dy=: (X * r - Z) - Y
dz=: (X*Y) - b*Z

dt=: 0.01
I=: + (dt * dx, dy, dz)

NB. Usage:  'noaxes' plot <"1|: I^:(i.5000) 0 1 0

'noaxes' plot <"1|: I^:(i.5000) 0 1 0
```

1.3　(1) と (2) の計算結果の比較

パラメータと初期値、dt を同じくすると lorenz1 と I(lorenz2) の結果は同一である。

```
 dt=:0.02
   a1=:  10 28 8r3 lorenz1 ^:(i.10) 1 1 1
   a2=. I ^:(i.10) 1 1 1
 a1,._,.a2
NB. ---------------------------------------------------
      1       1        1 _       1       1        1
      1    1.52 0.966667 _       1    1.52 0.966667
  1.104 2.03027 0.945511 _   1.104 2.03027 0.945511
1.28925 2.58702 0.939912 _ 1.28925 2.58702 0.939912
1.54881 3.23303  0.95649 _ 1.54881 3.23303  0.95649
1.88565 4.00607  1.00562 _ 1.88565 4.00607  1.00562
2.30974 4.94399  1.10307 _ 2.30974 4.94399  1.10307
2.83659 6.08761  1.27263 _ 2.83659 6.08761  1.27263
3.48679 7.48215  1.55012 _ 3.48679 7.48215  1.55012
```

```
4.28586 9.17701  1.98922 _ 4.28586 9.17701  1.98922
  (lorenz1)                   (lorenz2)
```

2 ロレンツモデルとルンゲクッタ法

2.1 C.Reiter の方法

C.Reiter の「Fractal visualization and J 第 3 版」でマトリクスとルンゲクッタ法でこの微分方程式を計算しているのを見受けた。

1. C.Reiter によるロレンツのマトリクス。横長のマトリクスを用いて巧妙に作成されている。
*2

$$\begin{cases} X' = & -\sigma X & +\sigma Y & \\ Y' = & \gamma X & -Y & -XZ \\ Z' = & XY & & -bZ \end{cases}$$

	x	y	z	xy	xz
X'	-10	10	0	0	0
Y'	28	-1	0	0	-1
Z'	0	0	$-8r3$	1	0

$Y' = \gamma X - Y - XZ$ の $-XZ$ と $Z' = XY - bZ$ の XY を別項に書き出している。非線形方程式も横長マトリクスで計算できる。
*3

```
   M
_10 10    0 0  0
 28 _1    0 0 _1
  0  0 _8r3 1  0
```

2. 初期値の x, y, z に加え、xy, xz を作成している。（ここがポイント）

```
   (] , {. * }.) 0.1 0.2 0.3
0.1 0.2 0.3 0.02 0.03   NB. make x y z xy xz
```

*2 かって線形化の好例として紹介したが、線形化を意識しないで、素直にマトリクスに乗せた方が良いようだ
*3 ネスティッド・アレー（2 重配列）や文字列操作などがなくとも表現できる

3. C.Reiter の lorenz3z の script

```
NB. Lorenz3
lorenz3z=: 1 : 0
'S B R'=. m                                            NB. s b r
M=. ((-S),S,0 0 0),(R,_1 0 0 _1),: 0 0 ,(-B),1 0   NB. make matrix
M&(+/ . *)@([ , {. * }.)                               NB. 計算部分
)
```

(a) `+/ . *` は内積計算を行う。`M (+/ . *) 初期値`
(b) 初期値の項数はマトリクス M の列数と等しくなければならない
(c) 出力は M の行数すなわち連立方程式の元の数となる。
(d) ループ `^:(i. n)` では出力を 1 回づつ受けた上で xz, yz をその都度構成して入力する

4. C.Reiter によるルンゲクッタ法のスクリプト。ループはタシットの外付けなので、実にシンプルである。
   ルンゲークッタ法はコンピューター以前の 1900 年ごろに提唱されている。
   差分計算はルンゲクッターに委ねて疑似的に行うことで更にスクリプトが簡約される。

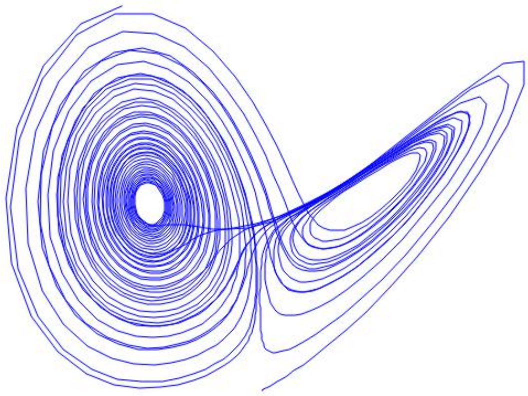
```
   rk=:1 : 0
:
h2=. -: x
k1=. u y
k2=. u y + h2*k1
k3=. u y + h2*k2
k4=. u y + x *k3
y+(x%6)*k1+k4++:k2+k3
)
```

- 1 : 0 は動詞 (関数) を引数に取る副詞型
- u は左の動詞を引数入力
- +: double　　×2

5. Usage:

```
 0.002 (10 8r3 28 lorenz3) rk ^:(i.100) 0.1 0.2 0.3
 'noaxes' plot {@|:   0.002 (10 8r3 28 lz) rk ^:(i.2000) 0.1 0.2 0.3
```

6. run



2.2 (1) と (3) の比較

差分計算とルンゲクッタ法の比較。良い線を行っていると思われる。

```
  a1=:  10 28 8r3 lorenz1 ^:(i.10) 0.1 0.2 0.3
    a3=.  0.01 (10 8r3 28 lorenz3) rk ^:(i.10) 0.1 0.2 0.3
   a1,._,.a3
NB.  -------------------------------------
     0.1      0.2      0.3 _      0.1      0.2      0.3
    0.11   0.2257   0.2922 _ 0.110802  0.22703 0.292328
 0.12157 0.253922 0.284656 _ 0.123288 0.257007 0.284915
0.134805 0.285076 0.277374 _ 0.137599 0.290386 0.277769
0.149832 0.319597 0.270362 _ 0.153908 0.327662 0.270904
0.166809 0.357949 0.263631 _ 0.172424 0.369377 0.264336
0.185923 0.400636 0.257198 _ 0.193385  0.41613 0.258089
0.207394  0.44821 0.251084 _ 0.217072 0.468585 0.252193
0.231476 0.501277 0.245318 _ 0.243801 0.527484 0.246688
0.258456  0.56051 0.239937 _ 0.273937 0.593653 0.241628
  lorenz1                       lorenz3(runge-kutta)
```

2.3 ロスラーモデル

1976 年にドイツの化学者ロスラーが提唱したロレンツモデルを簡略したカオスを生じるモデル。

$$\begin{cases} \dfrac{dx}{dt} = & -y - z \\ \dfrac{dy}{dt} = & x + ay \\ \dfrac{dz}{dt} = & b + (x + c)z \end{cases}$$

パラメーターはロスラーは次とした。

$a = b = 0.2 \qquad c = 5.7$

次のもよく用いられる。

$a = b = 0.1 \qquad c = 14$

$$\begin{cases} \dfrac{dx}{dt} = & -y - z \\ \dfrac{dy}{dt} = & x + ay \\ \dfrac{dz}{dt} = & b + (x + c)z \end{cases}$$

	x	y	z	xz	b
X′	0	−1	−1	0	0
Y′	1	a	0	0	0
Z′	0	0	−c	1	b

マトリクスをパラメーター $a = b = 0.2 \qquad c = 5.7$ を用いて構成したもの。b は定数項なので作成に少し工夫が要る

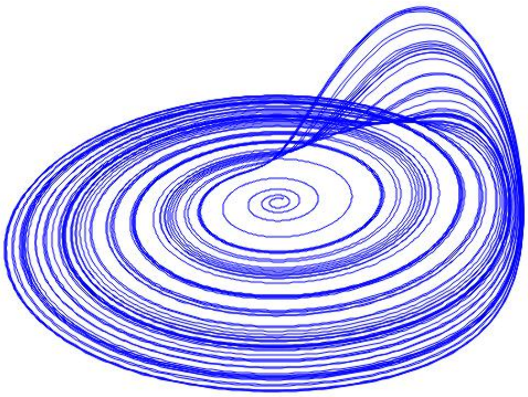
```
   M2
0  _1   _1 0   0
1 0.2    0 0   0
0   0 _5.7 1 0.2
```

```
  'noaxes' plot {@|:  0.02 (0.2 0.2 5.7  rossler) rk ^:(i.2000) 0.1 0.2 0.3
```

```
NB. rossler
rossler=: 1 : 0
'a b c '=. m                                          NB. a b c
M2=. (0 _1 _1 0 0),(1,a,0 0 0),: 0 0 ,(-c),1 ,b       NB. make matrix
M2&mp@mk_init2                                        NB. 計算部分
)

mk_init2=: ] , ({. * {:),1:
```

- `mp=:+/ . *  NB. 内積`
- mk_init2 は初期値やリターン値を係数マトリクスの形に成形する
- 最後の 1:は常に 1 を出力する動詞であり、定数項 (b) の個所を示している



References

Cliff Reiter [Fractal Visualization and J] 3rd edition Lulu 2007

M.Hirsch S.Smale R.L.Devaney 「力学系入門　原著　第 2 版」共立出版　2007